りそなアジア・オセアニア財団 2019 年度　環境プロジェクト　活動報告書
「インドネシアにおける『森の聞き書き』環境教育プログラム――自立的な仕組みの構築をめざして」

１．はじめに

一般社団法人あいあいネットは、NPO 法人共存の森ネットワークと協働し、2012 年からインドネシアの高校生を対象に、「聞き書き」を活かした環境教育プログラムの創出に取り組んできた。本事業は、これまでの取組と成果を踏まえ、インドネシアの高校、政府機関、大学、NGO などとの連携・協働をさらに強化することで、「聞き書き」手法を活かした環境教育プログラムがインドネシアで自立的、発展的に実践される仕組みの構築を目的とした。

3 年間の助成の最終年度にあたる平成 31 年度（2019 年度）は、主に、以下の活動を実施した。なお、新型コロナ感染症拡大に伴い、半年間の活動期間の延長を申請し、2020 年 9 月までを活動期間とした。

本報告書では、まず、最終年度の活動内容を報告した後、これまでのインドネシアでの「聞き書き」を軸とした環境教育の取組の成果と課題を整理したい。

2. 最終年度の活動報告

今年度実施した主な活動について、時系列に報告する。

1） Makassar International Writers Festival での発表（2019 年 6 月 28 日）

2011 年から、インドネシア全国から主に若手作家を招いて開催されている Makassar International Writers Festival(以下、MIWF)の関係者から、インドネシアでの聞き書きの成果を報告するセッションを 2019 年度の MIWF で持つことを提案され、インドネシア側関係者と協議の上、”Story Telling, Disaster and Resilience”をテーマとしたセッションを企画した。セッションは、2018 年 9 月 28 日に中スラウェシで発生した地震・津波を経験した高校生 Reza さん（聞き書き研修参加者）、被災者への聞き書きをまとめた高校生 Fitria さん、ゴロンタロの聞き書き研修参加者 Putri さん、中バナワ高校 Risna 先生、ゴロンタロ国立大学教員 Lilan Dama さん、Kikigaki Indonesia 事務局長 Abidin さん、島上が報告し、インドネシアでコンサルタントとして活躍する松井和久さ

MIWF 創設者 Lily、Riri Riza と聞き書きセッション発表者

んが司会を担った。

MIWF 創始者・作家・2018 年度インドネシア政府文化賞受賞者である Lily Yulianti Farid さん、インドネシアで大ヒットした映画「Laskar Pelangi(邦訳: 虹の少年たち)」の監督などとして知られる Riri Riza さんなどから、聞き書きは若者の主体的な学びだけではなく、持続可能な社会づくりにもつながる貴重な取組であるとの評価を得た。

2）聞き書き研修の準備・打ち合わせ(2019 年 6 月)

MIWF の前後に、ゴロンタロ(島上)と中スラウェシ（島上、Abidin）が訪問し、研修実施について話し合った(2019 年 6 月)。

3）聞き書き研修の実施とモジュールの作成（2019 年 7～9 月)

2019 年度は、ゴロンタロ国立大学、中スラウェシ州ドンガラ県中バナワ第一高校、ボゴール農業大学、ボゴール農業大学付属コルニタ高校との連携により、ゴロンタロ、中スラウェシ、ボゴールの三か所で聞き書き研修を実施した。

【ゴロンタロ】

昨年度に引き続き、ゴロンタロ国立大学にて聞き書き研修を 7 月 19 日に実施した。ゴロンタロ州内の 17 高校から生徒 20 名の他、高校教員、大学教員、Kikigaki Indonesia から Zaenal Abidin と Nurhady Sirimorok、日本から島上の 計約 50 名が参加した。ゴロンタロ州内の参加者の旅費および研修の会場費・研修中の食費はすべてゴロンタロ国立大学が負担し、日本側は、ゴロンタロ外部からの関係者の交通費・宿泊費・謝礼のみ負担した。

ゴロンタロでの聞き書き研修(7 月 19 日)

【中スラウェシ】

昨年度は、地震・津波で研修が実施できなかった中スラウェシ州では、ドンガラ県中バナワ第一高校が会場校となり、Kikigaki Indonesia の中スラウェシ・コーディネーターである David Lamanyuki と Ewin Laudjeng らの協力で研修を実施した（7 月 22～23 日)。中バナワ郡内の 6 校とパル市内の 1 校から生徒 22 名の他、高校教員、Kikigaki Indonesia から Zaenal Abidin と Nurhady Sirimorok、島上など計 35 名が参加した。研修では、中スラウェシの聞き書き修了生がファシリテーターを担った。

中スラウェシでの聞き書き研修(7 月 22-23 日)

中バナワ第一高校「聞き書きサークル」メンバー

中バナワ第一高校には、聞き書き研修に参加した生徒らを中心に「聞き書きサークル」が組織されており、そのメンバーと担当教員が研修の準備に大きな役割を担った。

【ボゴール】

西ジャワ州のボゴール農業大学付属コルニタ高校で、2019 年 9 月 26 日に、コルニタ高校生徒 15 名を対象とした聞き書き研修を実施した。Kikigaki Indonesia から Zaenal Abidin が協力し、コルニタ高校の教員と聞き書き研修修了生がファシリテーターとして関与した。

また、ボゴール農業大学では、大学の共通教育機構と連携し、大学一年生 50 名を対象に聞き書き研修を実施した。Kikigaki Indonesia から Zaenal Abidin と Ni Putu Ayu Eka Sundari が協力した。

以上の研修の実施を踏まえ、研修モジュールを作成した。

4）聞き書きコンテストの実施(2019 年 12 月)

上記の聞き書き研修に参加した生徒たちは、自分たちの各地域で自ら名人を探し、取材し、作品をまとめていった。作品を仕上げた生徒から、計 38 作品（高校生 27 作品、大学生 11 作品）が 12 月に Kikigaki Indonesia 事務局に提出された。

これを Kikigaki Indonesia が選定・依頼した審査員計 8 名が評価し、優秀作品（高校生部門から 11 作品、大学生部門から 4 作品）を選出した。いずれも、身近な資源（竹、土、ココヤシ、天然染料、木材、サゴヤシ澱粉、ヤシ砂糖、コーヒー豆などから不用品まで）を活かしてきた話し手の生業と人生を丁寧に聞き取った労作であった（約半数が現地語で聞き取り、インドネシア語訳を併記)。

表 1 ：2019 年度聞き書きコンテスト入賞作品一覧

	話し手の仕事（地域）	話し手の地域	聞き手（所属）
【高校生部門】			
金賞	竹籠づくり	ゴロンタロ	Intan（ｺﾞﾛﾝﾀﾛ・ボリヨフト第一高校）
金賞	土器づくり	ゴロンタロ	Mulyani（ｺﾞﾛﾝﾀﾛ・ティラムタ第一高校）
金賞	伝統的コーヒー焙煎	中スラウェシ	Bela（中バナワ第一高校）
銀賞	ココヤシ登り	ゴロンタロ	Eugine（ｺﾞﾛﾝﾀﾛ・ボリヨフト第一高校）
銀賞	伝統菓子作り	バランカラヤ	Vierina（ﾊﾟﾗﾝｶﾗﾔ第二高校）
銀賞	炭焼き	中スラウェシ	Dian（中バナワ第一高校）
銅賞	漁仕掛けづくり	ゴロンタロ	Natasya（ｺﾞﾛﾝﾀﾛ・タラガ第一高校）
銅賞	農業	ゴロンタロ	Vista（ゴロンタロ第二高校)

銅賞	サゴヤシ澱粉とり	中スラウェシ	Triwahyu（中バナワ第一高校）
努力賞	不用品回収	ボゴール	Rifki（ボゴール・コルニタ高校）
努力賞	伝統菓子作り	中スラウェシ	Ummu（南バナワ第一高校）
【大学生部門】			
金賞	海藻採取	ランプン	Lilis（ボゴール農業大学学生）
銀賞	木工ろうけつ絵描き職人	中部ジャワ	Salina（ボゴール農業大学学生）
銅賞	伝統的農民	中部ジャワ	Yopi（ボゴール農業大学学生）
銅賞	天然ろうけつ染め職人	中部ジャワ	Mulki（ボゴール農業大学学生）

5）聞き書き成果発表セミナー（2020 年 2 月 2 日）

聞き書きコンテストの入賞者らを招き、聞き書き成果発表セミナーを 2 月 2 日にボゴール農業大学の共通教育機構(PPKU)との共催でボゴール農業大学にて開催し、約 130 名が参加した。日本およびインドネシアでのこれまでの聞き書きの取組を紹介した後、入賞者による成果発表し、環境林業省社会林業・環境パートナー局長、民間企業（Danone）CSR 担当者、大学教員（Soeryo Adiwibowo 氏）がコメントを寄せた（Soeryo Adiwibowo 氏からのコメントは資料 1 参照）。

各地から集まった高校生・引率教員の集合写真

6）聞き書きの活動評価と今後を話し合うワークショップの開催(2020 年 2 月 3～4 日)

セミナーの後、聞き書きの経験を振り返り、Kikigaki Indonesia の今後を活動と体制を話し合うワークショップを開催した。聞き書き入賞者・修了生・参加者と関係教員、Kikigaki Indonesia の主なメンバー計 19 名が参加し、合宿形式で話し合った（共有された主な要点は資料 2 参照）。

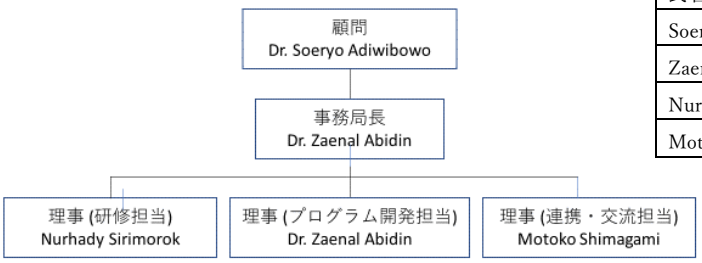
7）Kikigaki Indonesia 事務局体制の整備

本助成による活動最終年度でいることを踏まえ、Kikigaki Indonesia の事務局体制づくりを進めた。Zaenal Abidin（ボゴール農業大学教員）が事務局長を担い、聞き書き研修の修了生の一人である Ni Putu Ayu Eka Sundari（コルニタ高校卒、ボゴール農業大学卒）を事務局スタッフとしてアルバイト雇用し、体制づくりを進めた。また、ボゴール農業大学教員

で環境林業大臣のアドバイザーをつとめ、本事業の初期段階からの理解者である Soeryo Adiwibowo さんが顧問を担うこととなった。

ワークショップでの議論から、下記のような体制で Kikigaki Indonesia を組織することが合意され、ゴロンタロ、中スラウェシ、パランカラヤ、ボゴールなど各地域の拠点となる大学、NGO、高校と連絡・連携をとりながら、活動を実施していくこととなった。

図 1 ：Kikigaki Indonesia 組織図



氏名	所属
Soeryo Adiwibowo	ボゴール農業大学教員
Zaenal Abidin	ボゴール農業大学教員
Nurhady Sirimorok	NGO Ininnawa (マカッサル)
Motoko Shimagami	あいあいネット副代表理事

8） Kikigaki Indonesia ウェブページの整備

Kikigaki Indonesia の目的、活動内容、聞き書き作品などを情報発信するメディアとしてウェブページ（https://kikigakiindonesia.com/）を開設し、整備をすすめている。ウェブ整備と更新はボゴールに事務所を置くウェブ制作会社 ART!が担っている。

3. 事業実施の成果と課題

本事業は、2012 年以来展開してきた取組と成果を踏まえ、「聞き書き」環境教育プログラムがインドネシアで自立的、発展的に実践される仕組みを構築することを目的とした。これまでの成果と課題を以下の三点から整理したい。

1） インドネシアにおける Kikigaki の認知と拡がり

2012 年に、ボゴール農業大学コルニタ高校との連携活動として始めた聞き書き研修は、本事業の助成をうけることで、中スラウェシの NGO との連携でパル市内・周辺の複数の高校、パランカラヤ市政府との連携でパランカラヤ市内の高校、ゴロンタロ国立大学との連携でゴロンタロ州内の高校、さらに、ボゴール農業大学共通教育機構との連携でボゴール農業大学初年次学生のプログラムに広がってきた。こうした拡がりは、「聞き書き」が今のインドネシアに必要とされる活動であることの証左だろう。これは、本事業の第一の成果といえる。

2） 環境教育プログラムとしての効果

では、以上のように拡がってきた「聞き書き」は、環境教育プログラムとしてどのような

効果をあげただろうか。多民族国家であり、インドネシア語の普及と生活様式の変化により、民族の言語や文化の次世代への継承が課題となりつつあるインドネシアでは、「聞き書き」を文化継承のプログラムとして活かす可能性がたびたび議論となった。そうした可能性は尊重しつつも、本事業では、「自然」に関わる生業を営んできた年配者を話し手・名人とすることを原則として進めてきた。「自然」と関わる生業は、インドネシアで進む経済発展と脱農化の中で「遅れたもの、価値のないもの」と見なされる一方で、社会の持続可能性や民族の慣習・文化・言語の多様性が持つ可能性や課題が実態として最も現れるからである。その意味では、環境の持続可能性と文化の多様性の保持は表裏一体ということができる。

優秀作品のリスト（表１）とセミナーでの生徒たちの発表を聞いた Soeryo Adiwibowo さんのコメント（資料１）に表れているように、聞き書きは農村部に暮らしてきた人々に対する「共感」や「尊敬」といった感情を生むとともに、生徒たちの社会や発展に対する見方を変化させるきっかけとなったといえる。

日本の「聞き書き甲子園」では、こうした生徒たちの内面的な変化に加え、生徒たちが具体的な環境保全や地域再生の活動に主体的に関与する場をつくりだし、「地域が動き出す」契機となっていることが注目される。インドネシアでは、現段階ではそこまでの転換は生み出せていない。しかし、「聞き書き」をきっかけに、個々人の行動変容（話し手を繰り返し訪問する、聞き書き研修にファシリテーターとして関わる、自主的に「聞き書き」をすすめる、マングローブの植林に関わる、大学で林学コースを選択する、など）につながった生徒がみられることは、環境教育プログラムとして一定の効果をあげたと評価したい。そうした生徒たちの可能性と主体性をさらに引き出すような取組を、インドネシアに設立された Kikigaki Indonesia を基盤に、引き続き検討していくことも今後の課題である。

3） 自立的仕組みづくり

a） 関連機関・組織との連携

本事業では、インドネシアでの自立的な仕組みづくりをめざし、関係機関・組織との連携（関係機関による事業の予算化）を進めてきた。連携の話し合いを行った主な機関・組織は、ボゴール農業大学コルニタ高校、中スラウェシ州教育局、ドンガラ県政府、パランカラヤ市政府、ジャカルタ自然学校、ボゴール農業大学、環境林業省、教育文化省、ゴロンタロ国立大学、中バナワ第一高校であり、この中のコルニタ高校、パランカラヤ市政府、中スラウェシ州政府、ドンガラ県政府、ゴロンタロ国立大学、ボゴール農業大学共通教育機構、中バナワ第一高校とは、一部予算化を伴う連携が実現した。

しかし、政府機関やゴロンタロ国立大学との連携は、予算化されたものの、首長・局長・学長の交代により、方針がかわり、継続的な連携の仕組みには至らなかった。また、環境林業省からは、省の事業として全国展開する可能性が提起されたが、現在の Kikigaki Indonesia の体制で大規模に全国展開すると、形だけの活動となる可能性が危惧されたことから、実現しなかった。

規模は小さいが、継続的な連携となったのが、ボゴールのコルニタ高校の課外活動としての「聞き書き」、中スラウェシの中バナワ第一高校の「聞き書きサークル」の取組、ボゴール農業大学の初年次教育としての取組である。いずれも、「聞き書き」の意義を理解した教員や生徒が、それぞれが所属する組織を拠点に、小規模でも主体的・継続的な活動として予算化し、実施しているものである。まだ組織的な取組には至っていないが、ゴロンタロ国立大学の Lilan Dama 教員らは、自らが所属する学科の取組として聞き書きを実施する可能性を探っている。また、パランカラヤ第二高校の Purwadi 教員は、第二高校を拠点とした活動を模索している。インドネシア各地に、こうした主体的担い手が現れたことは本事業の成果であり、こうした担い手を通じて、小規模でも組織的な活動として継続・発展させ、連携していくことが今後の課題といえるだろう。

b) Kikigaki Indonesia の組織化

自立的な仕組みづくりにむけたもう一つの成果は、Kikigaki Indonesia が組織されたことである。聞き書き研修やコンテスト、セミナーの開催だけではなく、各地の主体的な担い手とやりとりし、組織的な連携をはかっていくためには、事務局となる組織が不可欠である。当初、研修の実施も事務局としての機能も日本側が主導していた。8 年間の取組の中で、徐々にインドネシア側にその機能を移し、最終年度は、研修の中身は、Zaenal Abidin、Nurhady Sirimorok が主に担当し、各地の聞き書き研修の修了生らが補佐する体制が整った。また、コンテストやセミナーの実務については、Kikigaki Indonesia 事務局アルバイト・スタッフとして、聞き書き研修修了生でもある Ni Putu Ayu Eka Sundari が担った。

最終年度は、本事業から人件費を支出し、アルバイト・スタッフをえることができたが、今後の課題として残るのは、Kikigaki Indonesia の事務局経費（主に人件費）をいかに確保していくかである。事業費という点では小規模ながら各地で予算化の目途がたったが、事務局人件費という点ではまだ目途がたっていない。インドネシア側での助成金・補助金申請も含め、事務局体制の整備と強化が今後の課題として残った。

4. 新型コロナ対応から見えてきた可能性と課題

最終年度の終盤から、日本とインドネシアにも新型コロナが拡がりはじめた。新型コロナへの対応と、そこから見えてきた可能性と課題について、最後にふれておきたい。

2 月のワークショップでは、各地域でそれぞれが予算確保につとめ、小規模であっても聞き書き研修を実施する方向で合意していたが、新型コロナの拡大に伴い、2020 年は、聞き書き研修も、聞き書き活動も中止となった。島をまたいだ移動も、地域内であっても都市部から農村部への移動が制限されたためである。Kikigaki Indonesia は、ウェブサイトの整備のみを進めた。

そうした中、事務局長となった Zaenal Abidin のイニシアティブで、2020 年 10 月 17 日（土）、ボゴール農業大学共通教育機構との連携で、Kikigaki に関する Webinar（zoom）が開

催された。2019 年の聞き書き研修修了生らが準備にあたった。短期間の告知であったにも関わらず、Webinar には 106 名が参加した。ボゴール農業大学学生 35 名の他、コルニタ高校生徒 10 名、中スラウェシから教員と生徒 7 名、ゴロンタロの教員と生徒 25 名、パランカラヤの教員と生徒 5 名、マカッサル、ソロなど他地域から 23 名、日本から島上が参加した。

ズームによる Webinar であったが、地方の高校生も自分の携帯から参加しており、コロナ下のインドネシアにおけるオンラインの進展には驚かされた。Google classroom を活用したフィードバックの提出も試みられた。研修や聞き書き自体は、対面での実施がきわめて重要だが、作品のまとめのプロセスや成果の発表・共有、聞き書き実施後の参加者間の交流やネットワーキングには、オンライン・メディアが活用していけることが実感できた。

新型コロナの拡大により、インドネシアでも急速に進展したオンライン・メディアを活用しながら、聞き書きの今後の展開を Kikigaki Indonsia のメンバーとともに検討していきたい。

資料 1: スルヨ・アディウィボウォさんのコメント

ボゴール農業大学の教員であり、環境林業省のアドバイザーもつとめるアディウィボウォ（ボウォ）さんは、インドネシアで「聞き書き」を展開する意義を深く受け止め、活動期間中、さまざまなアドバイスとサポートを提供してくれた。Kikigaki Indonesia では、顧問として関与してもらうこととなった。以下、セミナーでのボウォさんのコメントを記載する。

Soeryo Adiwibowo ボゴール農業大学教員

皆さん、こんにちは。スルヨ・アディウィボウォです。
ボウォとよんでください。吉野奈保子さん（ＮＰＯ法人共存の森ネットワーク）、島上宗子さん（一般社団法人あいあいネット）の話、ザエナルさん（ボゴール農科大学助教授）の話（日本とインドネシアの聞き書きについての報告）をお聞きして、いくつかコメントしたいと思います。

島上宗子さんとは、中スラウェシのロレ・リンドゥー国立公園周辺で調査していたときからの知り合いです。

数年、会わない期間があり、再会したとき、彼女から「聞き書き」を紹介されました。これは凄いプログラムだ、と直感しました。ですが、多くの人は「聞き書き」の凄さ、パワーに気づいていないと感じています。どこが凄いのか。

「聞き書き」は単に聞く、書くだけではありません。生徒たちは、畑や漁に一緒に出かけ、五感を総動員し、実際に見て、観察し、聞き、そして書くのです。ここにとても重要なプロセス、教室では学べない、深い教育のプロセスがあります。自分の目で見て、名人の話を聞き、そして書き起こす。その中から、農村部に暮らしてきた人々に対する「共感」や「尊敬」といった感情が生まれます。それまで「かわいそう」「貧しい」「重労働だな」としか見ていなかった人々に対する感情が、話を聞き、それを書き起こす中で大きく変わっていくのです。

私が専門とする社会科学の分野に質的応用的調査とよばれる手法があります。ボゴール農業大学をはじめ、あらゆる高等教育機関で数多く行われています。たとえば、果物の生産性をあげることがテーマであれば、調査対象は果物、漁獲量を上げるのであれば、調査対象は魚になります。もしも農家に話を聞くのであれば、農家がインタビューの対象です。

しかし、**「聞き書き」では、農家を調査の「対象・客体」とはみず、「主体」とみることになる。「対象」ではなく「主体」。これは大きな転換です。**聞き書きでは、名人の話をどんどん掘り下げていく。どう生きてきたのか、どう日々を暮らしているのか、人生に対する姿勢や人生観を聞いていく。そのプロセスの中で、聞き手は相手に対する理解を深めていきます。あぁ、外から見ていたときは重労働だし、恵まれているように見えなかったけれど、実は名

人の人生観、生き方はすごいんだな、と。礼儀正しくしなさいとか、ああしなさい、こうしなさい、と外からやかましくいうことなしに、自然と心に染みこんでいく。これが「聞き書き」の凄さだ、と私は考えています。

今日はそれに加えて、第二の転換をみることができました。インドネシアは、日本の「聞き書き」にみる、この第二の転換から学ばなければならない。**吉野さんの話を聞いていると、「聞き書き」に参加した生徒だけが変わったのではないことがわかります。誰が変わったのか。そうです。地域の人々が変わったのです。これが凄い。「聞き書き」が地域を変えたのです。自分たちはどこから来たのか、原点は何か、困難な状況をどうやって乗り越えてきたのか、共に生きる意味とは何か、何を大切にし、どこに向かっていきたいのか、そうしたことを見直すきっかけとなったのです。**吉野さんの話にあった新潟県村上市高根集落での、日本の「聞き書き」卒業生の活動や、東日本大震災で被災した地域の人々の経験がそれです。「聞き書き」をした人だけではなく、地域が動き出す。これは、「聞き書き」の第二フェーズ、これで「聞き書き」は次の段階に進んだのだと感じます。すばらしい。

同じようなことを私たちは大学の農村貢献実習に期待していますよね。ただ、方法が異なります。農村貢献実習では、学生たちが地域に変化を起こすエージェントとなるよう、様々な準備をさせます。技術を身につけて村に持ち込み、村人に提供しようとします。ですが、現実には、変わるのは誰かというと学生たちなんです。**まず必要なのは、実際に見て聞くこと。地域は何を経験してきたのか、何が起こっているのか、この地域のアイデンティティとは何かをゆっくりと理解し、それを地域に返すことが必要なのです。「聞き書き」の第二の転換は、地域が変わる、動き出すということにあります。**

インドネシアの学生たちに望むのは、学校だけを学びの場とするのではなく、日々の生活世界からも学ぶということです。年配者から学び、現実の社会から知識を得る、ということです。そうすることで、他者、特に農村部に暮らす人々により関心をもち、より叡智をもって生きることのできる人間になれます。初年次の学生たちが「聞き書き」を経験するのはとても大切です。そこから、学びは自然と深まっていくでしょう。農村貢献実習で自分はどうすればよいかも見えてくるでしょう。**彼らがどう成長し、変わっていくか、私たちにもわからない。蝶の理論です。飛び立っていくのです。一人の他者に向き合い、話を聞いたということをきっかけにして。**

「聞き書き」に参加した生徒さんたちの未来はより明るいと思います。スマホではなく、他者により関心をもてる人になっているのですから。

資料 2：聞き書きの活動評価と今後に関するワークショップ記録

2020 年 2 月 3～4 日に開催した聞き書きの活動評価と今後に関するワークショップでは、全体での議論の後、教員と高校生に分かれて「聞き書きはなぜ必要か」「聞き書きの継続のために必要なこと」をテーマに話し合いを行った。主な発言は以下のとおりである。

【引率教員の話し合い】

〇聞き書きの意義

- ✓ 聞き書きは、Literasi（リテラシー）のプログラムとして必要。
- ✓ 共感をそだてる。環境を知ることができる。
- ✓ 人格形成、社会への感受性として必要。
- ✓ 恥ずかしがり屋の生徒でも人前で話ができるようになる。たくさん質問するようになる。
- ✓ 分析ができるようになる。
- ✓ お互いに関心をもつ。化学反応がおこりやすい。
- ✓ 人との関係の保ち方を学ぶ

引率教員の話し合い

〇参加した生徒の様子や変化

- ✓ 「聞き書き」に参加したのは、普段はとてもおとなしい生徒。やってみなさいといったら、すごく緊張していた。手が冷たくなるくらい。生徒が発表するときは教師もドキドキした。
- ✓ はじめて参加した。生徒と一緒に名人を探した。湖の漁師。朝 6 時に生徒を連れて行き、一緒に漁にいった。生徒は喜んで、よく職員室に来るようになった。
- ✓ 初めは怖がっていたが、一人で取材に行った。知らない人と話をする勇気をもつことができた。年上の人、世代の違う人との交流にもなる。
- ✓ 年上の人に対して言葉を選ぶようになった。
- ✓ 生徒のモチベーションが上がる。年齢を重ねた名人に出会い、勇気を得る。
  若い自分たちは、もっとできるはずだと感じる。
- ✓ パルでは震災後の被災者の「聞き書き」をした。生徒だけで取材。私は SNS でコントロールしていただけだ。遠い場所に出かけるときは、保護者や兄弟が一緒に連れていくようにした。
- ✓ 書き起こしや編集の指導は、聞き書きを経験した先輩がみた。
- ✓ 消極的だった生徒がより積極的になり、賞を受賞したことも自信につながった。今は大

学生だが、後輩の相談にのってくれている。

- ✓ 一度、経験して先輩として役割（後輩の指導）を果たすようになると、生徒が変わる。
- ✓ ある生徒は、賞はとれなかったけれども、名人との関係はとても深くなっていた。目が見えない名人なので、今も名人を病院に連れていくのを手伝っている。

〇他の教育プログラムとの違い

- ✓ 他の教育プログラムは一過性で終わってしまうことが多い。私の生徒は、9 回も 10 回も名人に会いに行った。これまでの作品（別の生徒の作品）を見せて、これで十分かと聞くと、もう一度、行くと言い出した。
- ✓ 現場に行くことが大切だと思った。他のカリキュラムでも聞き書きの手法を取り入れた。生徒に直接、生産者に会いに行って、話を聞くように薦めた。
- ✓ 単に現場を歩くだけではなく、「聞く」ことができる。そして「書く」ことも重要だ。けれども「書く」のは好きではない生徒が多い。だから少し「強制的」に書かせる。発表会でボゴールに行くことができるのは、いいモチベーションになった。
- ✓ 作品をつくることが重要。それを本にすれば、生徒は誇りに思う。
- ✓ 「聞き書き」をすれば書く力がつく、大学に行っても役に立つという形で動機付けしている。

〇まとめ

1. 年配の人々の知恵を記録して伝えることができる。消えてしまう伝統的な知恵。
2. 学校の Literasi（リテラシー）の科目に役に立つ。
3. 子供たちに現実の世界を学ぶ機会を与える。
4. 共感を育てる。
5. 社会に対する感性を育てる。
6. 他者への理解を育てる。
7. 生徒同士、名人、卒業生、教師などの間の相互作用をうむ。
8. Silahturahmi（挨拶する）の機会と方法を学べる。
9. 聞き書きが終わっても、生徒と名人の関係が続く。
10. 聞き書きは成果や変化がよくみえる。寡黙だった生徒が勇敢になる。
11. 「聞き書き」は他の科目にも応用できる。
12. 教師は facilitator（ファシリテーター）。生徒が主役。
13. 教師にとっては、研修への参加証などが業績評価のポイントにつながる。
14. 研修に参加することは、学校自体の評価にもつながる。
15. 作品だけが評価の対象ではなく、人格形成の点で重要。

【参加高校生の話し合い】

〇聞き書きはなせ必要か→聞き書きを通じて何を得たか。

高校生、グループに分かれての話し合い

- ✓ 名人と聞き手には双方向のやりとり、相互理解のプロセスがうまれる。
- ✓ 名人から掘り下げたいのは、経験を通じた知恵。理論とか知識ではない。
- ✓ 名人は他人からどう思われようとも、誇りをもって仕事をしている。それを知ることで自分自身も誇りに思える。それを人に伝えたくなる。
- ✓ 人に伝えるときに、再び、相手を理解しようとするプロセスが必要になる。
- ✓ たくさんの知識を得た。在来の知恵とか。今どきの若者はあまり在来の知恵には関心がない。
- ✓ 聞き書きをすることで、なくなってしまう地域の知恵を記録する。
- ✓ 聞き書きをすると、知識が増えるだけではなくて、名人の家族のようになる。
- ✓ 社会的な問題にも目を向けられる。「かわいそうだ」で終わってしまっていることをきちんと記録する。
- ✓ 名人の言葉で記録する方法は、一般の論文と違って、読み手も興味をもつ。
- ✓ 一人一人は異なるから、それに応じたコミュニケーションの仕方が必要。寡黙な人とどうコミュニケーションをとるか。どのようにして自分を信頼してもらうか。
- ✓ 人間というのは、人がやっていることをみて学ぶ。名人の地域では、病気の人がいたら、隣組の全員がお見舞いにいったりする。その習慣に驚いた。隣人同士のつながりが大切だと学んだ。

〈聞き書きの活動を続けるために〉

〇研修について

- ✓ 「聞き書きとは何か」の説明がもう少しほしい。目的を明確にする。
- ✓ 研修は 3 日間ぐらい必要。
- ✓ 研修のワークショップ（インタビューの練習など）もフィールドで行いたい。
- ✓ 研修時だけではなく、作品を仕上げるまで個別のサポートがほしい。
- ✓ 書き起こしのとき、録音機がうまく動かなかった。録音機のチェックが事前に必要。

〇取材について

- ✓ 取材する名人のリストがほしい。
- ✓ 名人探しは難しい。何のために来たのかと聞かれる。
- ✓ 自分が聞きたいテーマで名人を探すのが難しい。
- ✓ 年齢は 50 歳前後といわれているが、探すのが難しいことがある。50 歳を越えていると、もう仕事をしていないこともある。たとえば、33 歳でも 20 年近くその仕事をしている人もいる。若くても長く仕事をしている人は名人だと思う。
- ✓ 名人に何か援助をもってきたかと思われることがある。ちゃんと目的を説明しないといけない。
- ✓ ボゴールでは名人探しが難しい。遠くまでいかないといけなかった。アクセスが難しい。公共交通もなく、道も悪い。
- ✓ 事前に名人について調べておいて、質問を準備する。→近所の人にどんな名人がいるか、どんな仕事をしているか、聞いておく。関連する情報を集める(インターネットなどを活用)。名人の職種に関する情報をあつめておく。
- ✓ 名人に話を聞いているのに、奥さんが応えることがある。→二人きりでインタビューできるようにうまくお願いする。
- ✓ 質問が理解してもらえないことがある。→シンプルな質問を準備する。
- ✓ 書き起こしをしたときに、質問が足りないことに気がつく。→インタビューをしたら、すぐに書き起こしをして、何が足りないかを確認する。
- ✓ 聞き書きでは、質問がとても重要。質問を掘り下げられないと、うすっぺらい作品になる。

〇作品のまとめについて

- ✓ 指導が少ないと思う。→もっとアドバイスがほしい。
- ✓ 指導が多すぎることもある。こうしろ、ああしろ、と言われる。→生徒の主体性や自立性を尊重した指導がほしい。
- ✓ トピックをわけるときに悩む。→書き起こしが終わったら、何度も読んでトピックをまとめていく。
- ✓ どの言葉を消していったらいいか悩む。→文章を整理する過程で、すべてをファイルに保存する。
- ✓ テーマをきめて、何を削除するか決める→たとえば、染色の仕事にテーマを決めたら、関係のない話は消す。私の場合、書き起こしは 50 頁あった。それを 6 頁まで減らした。
- ✓ 理解できない言葉や、普段は使わないジャワの丁寧語をどうするか。→わからないことがあったら、名人に確認する。あるいは、ジャワ語のわかる人に確認する。
- ✓ 録音が消えてしまったことがあった。→パソコンなどに保存する。

〇聞き書きの普及について

- ✓ 組織がない。相談できるような場所がない。
- ✓ 先生に直接個人的に参加するように言われた。学校の課外活動として組織されていたらよいと思う。
- ✓ 卒業生を組織できるといい。卒業生にも役割がある。
- ✓ Instagram、Web、YouTube を活用する。生徒が卒業生に連絡ができるといい。
- ✓ 作品をつくるガイドラインがあればよい。
- ✓ 活動の最初から今にいたるまでの記録があるとよい。
- ✓ 卒業生の中に記録係をつくればよい。YouTube にあげる。
- ✓ 卒業生で「聞き書きキャンプ」を企画したらいい。冷房のある部屋はいらない。お金もかからない。
- ✓ セミナーとワークショップは必要。コンテストも必要。
- ✓ 聞き書き展示会も必要。名人の作ったものを紹介する。→名人の収入向上にも貢献できる。
- ✓ 知り合いや友達や後輩に伝える。直接、聞き書きの経験を伝える。
- ✓ SNS で流せば、友達からたくさん質問がくる。聞き書きインスタグラムがあれば、情報がたくさんの人たちに届く。
- ✓ 研修に参加しなくても、テキストブックと応募用紙をダウンロードして参加できるようにする。
- ✓ 名人の住所・連絡先をいれておく。直接連絡できるようにする。
- ✓ ドンガラ県では、聞き書きコミュニテイで週に 1 回集まっている。先生や先輩が指導してくれる。

グループでの議論を共有する参加高校生